

秘密昆虫団の冒険

Kurihara Syusuke

栗原秀介



青山ライフ出版

秘密昆虫団の冒険

栗原秀介

目次

はじめに 6

第一話 秘密昆虫団の誕生 9

第二話 ベーゴマと仏壇 17

第三話 ロケット花火合戦 23

第四話 夏の日のご褒美 29

第五話 びん割 35

第六話 母の戦争とそろばん 41

第七話 紙芝居屋追跡作戦 47

第八話 火の見ヤグラ登頂作戦 55

第九話 缶詰カンテラの夜 63

第十話 秘密のすみか 69

あとがき 75

おまけの話 ロバのパン屋さん 77

ひつりいふ 81

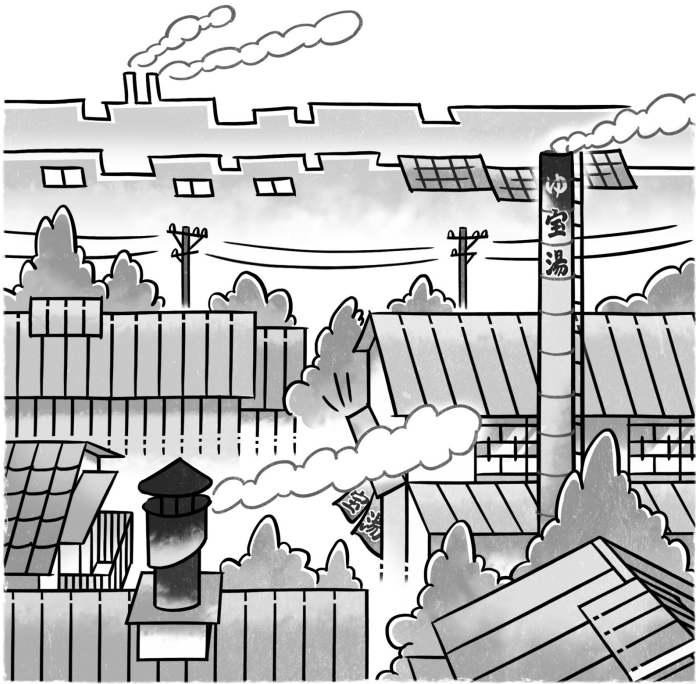
はじめに

この物語の舞台は、昭和四十年ごろの荒川下流に広がる鋳物の街です。街にはいくつもの工場が並び、その屋根から突き出た鋳物炉の煙突を人々は「キューポラ」と呼んでいました。鉄を溶かして型に流し込む作業を「吹き（ふき）」といい、子どもたちはその炎や音を遠くから眺めながら育ちました。

そんな街の片隅に、シュウ、ハジメ、ケンジの三人組がいました。彼らは同じ小学校の登校班で、兄弟のようにいつも行動をともししています。シュウは一人っ子で、どこか心細さを抱えていましたが、二

人と過ごす時間の中で、自分たちだけの特別な絆を見いだしていきます。彼らはある日、カマキリの卵の孵化に立ち会い、命のふしぎを目の当たりにしました。その体験をきっかけに、自分たちの仲間に名前をつけます―「秘密昆虫団」と。

ここに描かれるのは、そんな二人が過ごした子ども時代の冒険です。ベーゴマやロケット花火、缶詰カンテラや秘密基地作り。遊びの中にドキドキや発見があり、時に家族の記憶や大人の背中が影を落とす。それでも彼らは笑い合い、夢中になり、毎日を駆け抜けていきました。この本を開くことで、あなたの心にも、かつての夕焼けや川風の匂いがよみがえることを願っています。



第一話

秘密昆虫団の誕生

春の光がやわらかく差しこむ空き地で、シユウはぼんやりと土の上を見つめていた。去年の秋、枯れ草の根元でふと見つけた、白くふくらんだカマキリの卵。そのとき、ただの虫の巣ではないと直感した。中に小さな命がたくさん眠っている―そう思うと、不思議と胸が高鳴った。

その卵を拾い上げ、シユウは大事に家へ持ち帰った。机の隅にそっと置き、冬の間も時々のもぞき込んで、まだかな、まだかなと待ち続けていたのだ。

兄弟がいないことを少し負い目に感じていたシユウにとって、その卵は「ひそかな仲間」になるような気がしていた。